

どんな職業か

顧客の注文により、その身体に合わせた服をデザイン、作図から裁断、縫製仕上げまで一貫して仕立てあげる。まず、服のデザインをスタイル画に描き、細かい部分まで顧客と話し合っ決めて、生地、付属素材、被り物、時には靴のヒールの高さまでも想定してから、採寸をする。個々人の身体の立体的な曲線を型紙に写しとり、裁断、仮縫い・補正を経て本縫いを行い、アイロンをかけ、飾りやボタンなどを取り付けて完成させる。

高級なプレタポルテから、日常着までの幅広い婦人服の世界で、技術さえ身につけていればいかようにでも力を発揮できる。特に若い人のセンスの良さが期待される。

ミシンはかならずしも電動でなくてもよい。こころをこめてソフトに縫いあげるには、足踏みミシンにこだわる職人氣質のある人もいる。フォーマルドレスなどはシンプルなシルエットにビーズ、パールなど手芸的加工をして見どころを作ろうと試行錯誤する。苦しくも楽しい時間が持てて、達成感のある仕事である。

就くには

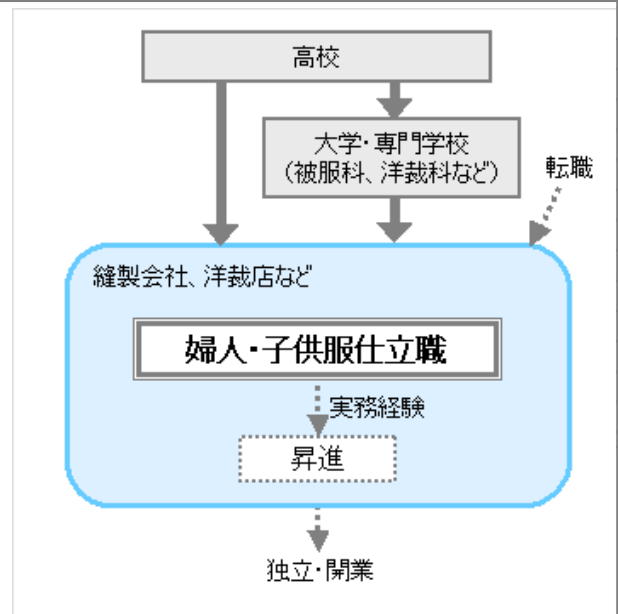
一般的には洋裁学校や専門学校で、基礎的な技術を身につけ、縫製会社か洋裁店に勤めて修業を積む。それが出来ない場合、家族や周りの人たちの服を数多く作らせて貰い、仕立ての数と種類の経験を積む。

優秀な一級技能士が開くオーダー店か教室で個人レッスンを徹底的に受ける場合もある。

厚生労働省の技能検定を受けて、プロの道に入り、洋裁をする人たちが結成する団体に所属してより多くの仲間と交流し、講習会やコンクールや技能競技大会に参加して技術の向上と見聞を広める。

婦人服は、素材の多様さ、デザインの豊富さ、体型の違いの多さに対応していくために、常に芯や付属品、ミシン、アイロンなどについての新しい情報を得なければならない。

基本的には、服作り、物作りが好きで根気よく続けられることが大切である。



労働条件の特徴

仕立て代は、顧客との話し合いで決まる。従業員、下請員などの場合、賃金は店の規模や土地柄によって格差がある。急ぎの場合は、夜遅くまでの残業や休日の返上、振り替えなどもある。最近では、ホテルで生地の展示会を催し、オーダーをうけて地方の自宅で縫いあげて送る例も増えてきている。

女性が大半を占めており、家事、育児など家庭との両立も可能である。また、年齢的には70、80歳まで身体が許す限りマイペースで働くことができる。

衣類は必需品であるため、今後も一定の労働需要が期待できる。

参考情報

関連団体 社団法人日本洋装協会
電話:03-3781-0680 FAX:03-3785-8780

関連資格 婦人子供服製造技能士